

横光利一

横 光 利 一

新潮社版

横 光 利 一

発行／1967年9月15日 十一刷／1969年9月25日
発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71
発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71
電話東京(260)1111(大代) 振替東京808 郵便番号162
印刷所／三晃印刷株式会社 製本所／新宿加藤製本所
本文用紙／本州製紙株式会社
函貼／三菱製紙株式会社 製函／文京紙器株式会社
カバー・扉・見返／特種製紙株式会社
表紙クロス／日本クロス工業株式会社

目次

日輪

五

蠅

七

静かなる羅列

三

春は馬車に乗って

八

上海

七

機械

二七

紋

解 年 注

說 譜 解

章

伊

藤

整

五元 五元 五元

二五

橫
光
利
一

日輪

序章

日輪

乙女達の一団は水甕みづがめを頭に載せて、小丘こやまの中腹にある泉の傍から、唄いながら合歓木の林の中に隠れて行った。後の泉を包んだ岩の上には、まだ凋れぬ太蘭の花が水甕の破片とともに踏みに残っていた。そうして西に傾きかかった太陽は、この小丘の裾遠く拡がった有明の入江の上に、長く曲折しつゝ廻か水平線の両端に消え入る白い砂丘の上に今は力なくその光りを投げていた。乙女達の合唱は華やかな酒楽の歌に変つて来た。そうして、林をぬけると再び、人家を包む円やかな濃緑色の団塊となつた森の中に吸われて行った。眼界の風物、何一つとして動くものは見えなかった。

そのとき、今迄、泉の上の小丘を蔽つて静まつていた萱の穂波の一点が二つに割れてざわめいた。すると、割れ目は数羽の雉子と隼とを飛び立たせつつ、次第に泉の方へ真直ぐに延びて来た。そうして、間もなく、泉の水面に映っている白茅の一行が裂かれたとき、そこには弦の切れた短弓を握つた一人の若者が立っていた。彼の大きく窪んだ眼窩や、その突起した顎や、その影のように暗鬱な顔の色には、道に迷うた者の、極度の疲労と饑餓の苦痛が現れていた。彼は這いながら岩の上に降りて来ると、弓杖ついて崩れた角髪をかき上げながら、渦巻く蔓の刺青を描いた唇を泉につけた。彼の首から垂れ下つた一連の白瑪瑙の勾玉は、音も立てず水に浸つて、静に藻を食う魚のように光っていた。

一

太陽は入江の水平線へ朱の一点となつて没していった。不弥の宮の高殿では、垂木の木舞に吊り下げられた鳥籠の中で、榎鳥が習い覚えた卑弥呼の名を一声呼んで眠りに落ちた。磯からは、満潮のさざめき寄せる

波の音が刻々に高まりながら、浜藻の匂いを籠めた微風に送られて響いて来た。卑弥呼は薄桃色の染衣に身を包んで、麤で彼女の良人となるべき卑狗の大兄と向い合いながら、鹿の毛皮の上で管玉と勾玉とを選び分けていた。卑狗の大兄は、砂浜に輝き始めた漁夫の松明の明りを振り向いて眺めていた。

「見よ、大兄、爾の勾玉は亥猪の爪のように穢れている」

と卑弥呼は云って、大兄の勾玉を彼の方へ差し示した。

「やめよ、爾の管玉は病める蚕のように曇っている」

卑弥呼のめでたきまでに玲瓏とした顔は、暫く大兄を睥んで黙っていた。

「大兄、以後我は玉の代りに真砂を爾に見せるであらう」

「爾の玉は爾の小指のように穢れている」と、大兄は云うと、その皮肉な微笑を浮べた顔を、再び砂浜の松明の方へ振り向けた。「見よ、松明は輝き出した」

「此処を去れ、此処は爾のごとき男の入る可き処ではない」

「我は帰るであらう。我は爾の管玉を奪えば爾を置いて帰るであらう」

「私の玉は、爾に穢された吾身のように穢れている。行け」

「待て、爾の玉は爾の靈よりも光っている。玉を与えよ。爾は玉を与えると我に云った」

「行け」

卑狗の大兄は笑いながら、自分の勾玉をさらさらと小壺に入れて立ち上った。

「今宵は何処で逢おう？」

「行け」

「丸屋で待とう」

「行け」

大兄は遺戸の外へ出て行つた。卑弥呼は残った管玉を引きたれた裳裾の端で掃き散らしながら、彼の方へ走り寄つた。

「大兄、我は高倉の傍で爾を待とう」

「我はひとり月を待とう。今宵の月は満月である」

「待て、大兄、我は玉を与えよう」

「爾の玉は、我に穢された爾のように穢れている」

大兄の哄笑は忍竹を連ねた瑞籬の横で起ると、夕闇の微風に揺れている柏の根の傍まで続いていった。卑弥呼は染衣の袖を噛みながら、遠く松の茂みの中へ消えて行く大兄の姿を見詰めていた。

二

夜は暗かった。卑弥呼は鹿の毛皮に身を包んで宮殿からぬけ出ると、高倉の藁戸に添って大兄を待った。栗鼠は頭の上で、栗の梢の枝を撓めて音を立てた。

「大兄」

野兎は苧麻の茂みの中で、昼に狙われた青鷹の夢を見た。そうして、彼は飛び跳ねると、苧麻の幹に突きあたりながら、零余子の葉叢の中へ駆け込んだ。

「大兄」

梟は木樨樹の梢を降りて来た。そして、嫁菜を踏みながら群る薏苡の下を潜って青蛙に飛びついた。

「大兄」

併し、卑弥呼の大兄はまだ来なかった。卑弥呼は藁戸の下へ蹲踞すると、ひとり萩を引いては投げ引いては投げた。月は高倉の千木を浮べて現れた。森の柏の静ま

った葉波は一斉に濡れた銀の鱗のように輝き出した。そのとき、軽い口笛が草玉の茂みの上から聞えて来た。卑弥呼は藁戸から身を起すと、草玉の穂波の上に半身を浮べて立っている卑弥呼の大兄の方へ歩いていった。

「大兄、大兄」彼女は鹿の毛皮を後に跳ねて彼の方へちか寄った。「夜は間もなく明けるであらう」

併し、大兄は輝く月から眼を放さずに立っていた。

「大兄よ、我は管玉を持って来た。爾は受けよ」と、卑弥呼は云って玉を大兄の前へ差し出した。

「爾は何故にここへ来た？ 我はひとり月を眺めにここへ来た」

「我は爾に玉を与えにここへ来た。受けよ、我は玉を与える」と爾に云った

大兄は卑弥呼の管玉を攫んでとった。

「我は爾に逢わんがためにここへ来た。爾は我に玉を与えにここへ来た。爾は帰れ」と大兄は云って再び空の月へ眼を向けた。

卑弥呼は黙って草玉の実をしごき取ると大兄の横顔へ投げつけた。大兄は笑いながら急に卑弥呼の方へ振

り向いた。そうして、彼女の肩へ両手をかけて、抱き寄せようとすると、彼女は大兄の胸を突いて身を放した。

「我は帰るであらう。我は爾に玉を与えた。我は帰るであらう」

「よし、爾は帰れ、爾は帰れ」と、大兄は云いながら、彼女の振り放そうとする両手を持った。そうして、彼女を引き寄せた。

「放せ、放せ」

「帰れ、帰れ」

大兄は藻痒く卑弥呼を横に軽々と抱き上げると、どつと草玉の中へ身を落した。さらさらと揺らめいた草玉は、その実を擦って二人の上で鳴っていた。

「卑弥呼、見よ、爾は彼方の月のように美しい」

彼女は大兄の胸の中に抱かれたまま、今は静に眼を瞑じて彼の胸の上へ頬をつけた。

「卑弥呼、もし爾が我が子を産めば姫を産め。我は爾のごとき姫を欲する。もし爾が彦を産めば、我のごとき彦を産め。我は爾を愛している。爾は我を愛するか」

しかし、卑弥呼は大兄を見上げて黙ったまま片手で彼の頬を撫でていた。

「ああ、爾は月のように黙っている。冷たき月は欠けるであらう。爾は帰れ」

大兄は卑弥呼を揺って睥睨した。が彼女は微笑しながら静に大兄の顔を見上げて黙っていた。

「帰れ、帰れ」

と大兄は云いつつ、彼女を抱いた両腕に力を籠めた。卑弥呼は大兄の首へ手を巻いた。そうして、二人は黙っていた。月は青い光りを二人の上へ投げながら、彼方の森からだんだん高く昇っていった。そのとき、一人の瘦せた若者が、生薑を噛みつつ木槌樹の下へ現れた。彼は破れた軽い麻鞋を、水に浸った俵のように重重しく運びながら、次第に草玉の茂みの方へちか寄って来た。卑狗の大兄は足音を聞くと立ち上った。

「爾は誰か」

若者は立ち停ると、生薑を投げ捨てた手で剣の頭椎を握って黙っていた。

「爾は誰か」と再び大兄は云った。

「我は路に迷える者」

「爾は何処いずこの者か」

「我は旅の者。我に糧かてを与えよ。我は爾に劍と勾玉とを与えるであらう」

大兄は卑弥呼の方を振り向いて彼女に云った。

「爾の早き夜は不吉である」

「大兄、旅の者に食を与えよ」

「爾は彼を伴のうて、食を与えよ」

「良きか、旅の者は病者のように瘦せている」

大兄は黙つて若者の顔を眺めた。

「大兄、爾はここにおいて、我を待て、我は彼を贄にえ殿へ伴なおう」卑弥呼は毛皮を被かつて若者の方を振り向いた。

「我に従つて爾は来れ。我は爾に食を与えよう」

「卑弥呼、我は最早もはやや月を見た。我はひとり帰るであらう」大兄は彼女を睥にらんで云った。

「待て、大兄、我は直ちに帰るであらう」

「行け」

「大兄よ、爾は我に代つて彼を伴なえ、我はここで爾を待とう」

「行け、行け、我は爾を待っている」

「良きか」

「良し」

「来れ」と卑弥呼は若者に再び云った。

若者は、月の光りに咲き出た夜の花のような卑弥呼の姿を、茫然として眺めていた。彼女は大兄に微笑を与える、先に立つて宮殿の身屋みぐやの方へ歩いていった。若者は漸く麻鞋ようやを動かした。そうして、彼女の影を踏みながらその後から従った。大兄の顔は顰ゆがんで来た。彼は小石を拾うと森の中へ投げ込んだ。森は数枚の柏の葉から月光を払い落して呟つぶやいた。

三

身屋みぐやの贄にえ殿の二つの隅には松明たいまつが燃えていた。一人の膳夫かきは松明の焰の上で、鹿の骨を焙もりながら明日の運命を占つていた。彼の恐怖を浮べた赧あかい横顔は、立ち昇る煙を見詰めながらだんだんと悦よろこびの色に破れて来た。そのとき、入口の戸が押し開けられて、後に一人の若者を従えた王女卑弥呼が這入はいつて来た。膳夫は振り向くと、火のついた鹿の骨を握にぎつたまま真孤まこの上へ跪ひざま拝まついた。卑弥呼は後の若者を指差して膳夫に云った。

「彼は路に迷える旅の者、彼に爾は食を与えよ。彼のために爾は臥所を作れ」

「酒は？」

「与えよ」

「粟は？」

「与えよ」

卑弥呼は若者の方を振り向いて彼に云った。

「我は爾を残して行くであらう。爾は爾の欲する物を彼に命じよ」

卑弥呼は臂に飾った釧の碧玉を松明に輝かせながら、再び戸の外へ出ていった。若者は真菰の上に突き

立ったまま、その落ち窪んだ眼を光らせて彼女の去った戸の外を見つめていた。

「旅の者よ」と、膳夫の声が横でした。

若者は膳夫の顔へ眼を向けた。そうして、彼の指差している下を見た。そこには、海水を湛えた盥の中に海螺と山蛤が浸してあった。

「彼の女は何者か」

「此の宮の姫、卑弥呼と云う」

膳夫は彼の傍から隣室の方へ下っていった。聴て、

数種の行器が若者の前に運ばれた。その中には、野老と蘿蔔と朱実と粟とがはいっていた。櫛の木の心から製した醃の酒は、その傍の酒甕の中で、薫ばしい香気を立ててまだ波々と揺らいでいた。若者は片手で粟を摘むと、「卑弥呼」と一言呟いた。

そのとき、君長の面前から下つて来た一人の宿禰が、八尋殿を通して贅殿の方へ来た。彼は痼疾の中風症に震える老軀を数人の使部に護られて、若者の傍まで来ると立ち停った。

「爾は何処の者か」

宿禰の垂れ下った白い眉毛は、若者を見詰めている眼の上で慄えていた。

「我は路に迷える旅の者」

「爾の額の刺青は玦である。爾は奴国の者であらう」

「否」

「爾の頸の刺青は月である。爾は奴国の貴族であらう」

「否」

「否」

「爾の唇の刺青は蔓である。爾は奴国の王子であらう」

「否、我は路に迷える旅の者」

「やめよ。爾の祖父は不弥の王母を掠奪した。爾の父は不弥の靈床に火を放った。彼を殺せ」

宿禰の茨の根で作った杖は若者の方へ差し向けられた。忽ち、使部達の劍は輝いた。若者は突っ立ち上ると、掴んだ粟を真先に肉迫する使部の面部へ投げつけた。劍を抜いた。と見る間に、使部の片手は劍を握ったまま胸を放れて酒の中へ落ち込んだ。使部達は立ち停った。若者は飛び退くと、杉戸を背にして突き立った。彼を目がけて盃が飛んだ。行器が飛んだ。覆った酒甕から酒が流れた。そうして、海螺や朱実が立ち籠めた酒気の中を杉戸に当って散乱すると、再び数本の劍は一斉に若者の胸を狙って進んで来た。身屋の外では法螺が鳴った。若者は劍を舞わせて使部達の劍の中へ駆け込んだ。そうして、その背後で痼疾に震えている宿禰の上へ飛びかかると、彼を真弧の上へ押しつけた。使部達の劍は再び彼に襲って来た。彼は宿禰の胸へその劍の尖をさし向けると彼らに云った。

「我を殺せ、我の劍も動くであろう」

使部達は若者を包んだまま動くことが出来なかつた。

た。宿禰は若者の膝の下で、なおその老軀を震わせながら彼らに云った。

「我を捨てよ。彼を刺せ。不弥のために奴国の王子を刺し殺せ」

併し、使部達の劍は振り上ったまま下らなかつた。法螺はただ一つますます高く月の下を鳴り続けた。銅鑼が鳴った。兵士達の銅鑼を叩いて馳せ寄る響が、武器庫の方へ押し寄せ、更に賛殿へ向って雪崩れて来た。

「奴国の者が宮に這入った」

「姫を奪いに」

「鏡を掠りに」

騒ぎは人々の口から耳へ、耳から口へと静まった身屋を包んで波紋のように拡がった。やがて、賛殿の外は、兵士達の鋒尖のために明るくなった。

「奴国の者は何処へ行った」

「奴国の者を外へ出せ」

賛殿の入口は動乱する兵士達の肩口で押し破られた。そのとき、彼らの間を分けて、一人卑弥呼が進んで来た。兵士達は争って彼女の前に道を開いた。彼女

は賛殿の中へ這入ると、使部達の劍に包まれた若者の姿を眼にとめた。

「待て、彼は道に迷いし旅の者」

「彼は奴国の王子である」

「彼は私の伴ないし者」

「彼の祖父は不弥の王母を掠奪した」

「劍を下げよ」

「彼の父は不弥の神庫（まぐら）に火を放った」

卑弥呼は使部達の劍の下を通って、若者の傍に出た。

「我は爾に食を与えた。爾は爾の国へ直ちに帰れ」

若者は踏み敷いた宿禰（ひよこす）を捨てて劍を投げた。そうして、卑弥呼の前に跪（ひざまず）くと、彼は崩れた角髪（みづら）の下から眼を光らせて彼女に云った。

「姫よ、我を爾の傍におけ、我は爾の下僕になろう」

「爾は帰れ」

「姫よ、我は爾に、私の骨を捧げよう」

「去れ」

「姫よ」

「彼を出せ」

使部達は劍を下げて若者の腕を握った。そうして、彼を戸外の月の光りの下へ引き出すと、若者は彼らを突き伏せて再び賛殿の中へ馳け込んだ。

「姫よ」

「去れ」

「姫よ」

「去れ」

「爾は我が命を奪うであろう」

忽ち、兵士達の鋒尖は、勾玉の垂れた若者の胸へ向つて押し寄せた。若者は鋒尖の映った銀色の眼で卑弥呼を見詰めながら、再び戸外へ退けられた。そうして彼は数人の兵士に守られつつ、月の光りに静まった萩と紫苑（しおん）の花壇を通り、紫竹（ししき）の茂った玉垣の間を白洲へぬけて、磯まで来ると、兵士達の嘲笑とともに嚙（か）ッと浜藻の上へ投げ出された。一連の波が襲って来た。そうして、彼の頭の上を乗り越えて消えて行くと、彼は漸く半身を起して宮殿の方を見続けた。

四

「王子は帰った」

「呪禁師の言はあたたつた」

「峠を越えて」

「矛木のように瘦せて帰つた」

奴国の宮は、山の麓の篠屋の中から騒ぎ始めた。そうして、この騒ぎは宮を横切つて、宮殿の中へ這入つて行くと、夜になつて、神庫の前の庭園で盛大な饗宴となつて變つて来た。

松明を咬んだ火串は円形にその草野を包んで立てられた。集つた宮人達には、鹿の肉片と、松葉で造つた餛飩や醃の酒が配られ、大夫や使部には、和稻から作つた諸白酒が与えられた。そうして、宮の婦女達は彼らの前で、まだ花咲かぬ忍冬を頭に卷いた鉦女となつて、酒樂の唄を謡いながら踊り始めた。数人の若者かなる楽人は、槽や土器を叩きつつ二絃の琴に調子を打つた。

肥え太つた奴国の宮の君長は、童男と三人の宿禰とを従えて槽の上で、瘦せ細つた王子の長羅と並んでいた。長羅は過ぎた狩猟の日、行方不明となつて奴国の宮を騒がせた。彼は十数日の間深い山々を廻つていた。そうして、彼は不弥へ出た。曾てあの不弥の宮

で、生命を断たれようとした若者は彼であつた。

「長羅よ、見よ奴国の女は美しい」

と君長は云つて踊る婦女達を指差した。

「我は爾に妻を与えよう。爾は爾の好む女を捜せ」

長羅の父の君長は、妃を失つて以来、饗宴を催すことが最大の慰藉であつた。何ぜなら、それは彼の面前で踊る婦女達の間から、彼は彼の欲する淫蕩な一夜の肉体を選択するに自由であつたから。そうして、彼は、回を重ねるに従つて常に一夜の肉体を捜し得た。今又彼は、槽の上から二人の婦女に眼をつけた。

「見よ、長羅、彼方の女の踊りは見事であらう」

長羅の細まつた憂鬱な眼は、踊りを外れて森の方を眺めていた。君長は空虚の酒盃を持ったまま、忙しうに踊りの中へ眼を走らせながら、再び一人の婦女を指差して云つた。

「彼方の女は子を産む猪のように太っている。見よ、長羅、彼方の女は子を胎んだ冬の狐のように太っている」

饗宴は酒甕から酒の減るにつれて乱れて来た。鹿は酔い潰れた若者達の間を漫步しながら酢漿草の葉を食

べた。やがて、一団の若者達は裸体となって、櫓の枝を振りながら婦女達の踊りの中へ流れ込んだ。このとき、人波の中から、絶えず櫓の上の長羅の顔を見詰めている女が二人あった。一人は踊りの中で、君長の視線の的となっていた濃艶な若い大夫の妻であった。一人は松明の明りの下で、兄の訶和郎と並んで立っている兵部の宿禰の娘、香取であった。彼女は奴国の宮の乙女達の中では、その美しい気品の高さに於て嶄然として優れていた。

「ああ長羅、見よ、彼方に爾の妻がいる」と、君長は云つて長羅の肩を叩きながら、香取の方を指差した。

香取の気高き顔は松明の下で、淡紅の朝顔のように赧らんで俯向いた。

「王子よ、我の酒盞を爾は受けよ」と、兵部の宿禰は傍からいって、馬爪で作った酒盞を長羅の方へ差し延べた。何ぜなら、彼の胸中に長く潜まっていた最大の希望は、今漸く君長の唇から、流れ出たのであったから。

併し、長羅の頭首は重く黙つて横に振られた。彼の

眼の向けられた彼方では、松明の一塊が火串の藤蔓を焼き切つて、赤々と草の上へ崩れ落ちた。一定の鹿は飛び上つた。そうして、踊りの中へ角を傾けて馳け込んだ。

「父よ、我は臥所を欲する。我を赦せ」

長羅はひとり立ち上つて櫓を降りた。彼は人波の後をぬけ、神庫の前を通つて暗い櫓の下まで来かつた。そのとき、踊りの群から脱け出した一人の女が、彼の後から馳けて来た。彼女は大夫の若い妻であつた。

「待て、王子よ」と彼女は云つた。

長羅は立ち停つて後を向いた。

「我は爾の帰るを、月と星とに祈つていた」

長羅は黙つて再び母屋の方へ歩いていった。

「待て、王子よ。我は夜の来る度に爾の夢を見た」

併し、長羅の足はとまらなかつた。

「ああ、王子よ。爾は我に言葉をかけよ。爾は我を森へ伴なえ。我は我の祈りのために、再び爾を櫓の上で見た」

そのとき、二人の後から一人の足音が馳けて来た。